S20 - Hiroaki Umeda

Any promotional material must be sent to the company for approval before printing: contact(at)hiroakiumeda.com

version 1.2 - updated 12 June, 2015

E-mail: contact(at)hiroakiumeda.com Web: http://hiroakiumeda.com

Contents

Biography

Hiroaki Umeda 3

Thoughts

1. Creative Principles ｜ 創作原理 4
2. Dance Method ｜ダンス理論 5
3. Choreographic Project ‘Superkinesis’｜振付プロジェクト’Superkinesis’ 6
4.Technology and Visual Installations｜テクノロジーとインスタレーション 7

Project

Somatic Field Project 8

Solo
- Intensional Particle 9
- split flow 10
- Holistic Strata 11
- Haptic 12
- Adapting for Distortion 13
- Accumulated Layout 14
- Duo 15
- while going to a condition 16

Superkinesis - Choreography Project
- 4. temporal pattern 17
- 3. isolation 18
- 2. repulsion 19
- 1. centrifugal 20

Visual Installations
- kinesis #1 – screen field 21
- split flow Installation 22
- Holistic Strata Installation 23
- Haptic Installation 24

Collaborations
- Peripheral Stream 25
- Interfacial Scale 26

History

Choreography 27
Installation 27
Solo 28

Information

Contact 32

Hiroaki Umeda - Biography

梅田宏明（うめだ・ひろあき）振付家、ダンサー、ビジュアル・アーティスト。

2000 年に、カンパニー「S20」設立。以後、そのテクノロジーを駆使しながらも身体強度の高い作品が評価され、欧州、北米、南米、アジア、中東、アフリカ、オーストラリアの各都市で公演する。視覚芸術と身体芸術の境界を越えるそのダンス作品は、デジタル・アートからの強い影響と共に創作へのホリスティック（全体的）なアプローチに特徴があり、身体のみならず、光、音、映像、そしてなにより時間と空間を振付可能な一要素として捉えている。「時間と空間を振付ける」というクリエイションの可能性を追究し、現在では振付家・ダンサーとしてだけでなく、作曲家、照明デザイナー、舞台美術家、ビジュアル・アーティストとしても活動の裾野を広げている。

1977 年、東京都まれ。高校卒業後、日本大学芸術学部写真学科に入学。在学中、写真より鑑賞者に身体的な経験を与えられる方法論に興味が移り、20 歳のときにバレエ、ヒップホップ、モダンダンスなどのダンスレッスンを受け始める。約1年後、すべてのレッスンを中断し、カンパニー「S20」設立。特定のジャンルに束縛されることなく、多様なダンスメソッドと他の芸術分野を自在に統合する、独自のマルチ・ディシプリナリー（分野横断的）な表現方法を開拓しはじめる。2002 年、横浜ダンスコレクション R で発表した『while going to a condition』が高く評価され、フランスの Rencontres Choréographiques Internationales に招聘される。ディレクターのアニタ・マチュー氏に「視覚的で、知覚的な経験。独創的で将来性のある若いアーティストの誕生」と称賛される。

2007 年、パリのシャイヨー国立劇場でソロ新作『Accumulated Layout』を連日満員の観客に上演し、さらに評価を高める。以後、梅田のシグネチャー・スタイルとして認知されるようになる、デジタル・イメージ、ミニマル・サウンドスケープ、そして極めて雄弁な身体を美しく統合するソロ新作群――『Adapting for Distortion』（2008 年）、『Haptic』（2008 年）、『Holistic Strata』（2011 年）、『split flow』（2013 年）――が、旧作と共に定期的に世界の主要フェスティバルや主要劇場に招聘されるようになる。主な会場に、Festival d' Automne（パリ）、Centre Pompidou（パリ）、Biennale de la Danse（リヨン）、Kunstenfestivaldesarts（ブリュッセル）、Festival Romaeuropa（ローマ）、Tanz im August（ベルリン）、Tanzquartier Wien（ウィーン）、New York Live Arts（ニューヨーク）、Barbican Centre（ロンドン）、Sydney Opera House（シドニー）、National Chiang Kai-shek Cultural Center, R.O.C.（台北）、あいちトリエンナーレ（名古屋）など。山口情報芸術センターと共同制作された近年の代表作のひとつ『Holistic Strata』は、ダンス作品としてよりも「キネティック・インスタレーション」として創作され、そのダンスとビジュアル・アートが見事に融合された舞台を、仏ル・モンド紙はワンマン・ショーならず「ワンマン・ランドスケープ」と称賛した。

2009 年、10 年計画となる振付プロジェクト <Superkinesis> を開始。コンテンポラリー・ダンサー（1. centrifugal、2009 年）、ヒップホップ・ダンサー（2. repulsion、2010 年）、クラシックバレエ・ダンサー（3. isolation、2011 年）、アジア伝統舞踊ダンサー（4. temporal pattern、2013 年）など、異なる文化的背景を持つダンサーたちとの共同創作をはじめる。本プロジェクト開始直後から、梅田の鋭い身体感覚とダンサーの肉体を調和させる革新的な振付スタイルが広く注目を集め、多くが国際的な劇場からの委託作品として制作される。一例に Théâtre de Suresnes Jean Vilar (2. Repulsion)、Hebbel am Ufer (HAU) (3. Isolation)、Esplanade - Theatres on the Bay、Chiang Kai-Shek Cultural Center, R.O.C、あいちトリエンナーレ (4. temporal pattern) などがあげられる。Superkinesis とは、舞踊化される以前の運動言 (kinesis) を探求し、そこからの超越的 (Super) な空間秩序の構築を目指す概念である。また梅田はこの一連の振付作品を通して、ダンサーの身体を「自然力に影響される自然物」として捉えている。そしてダンサーの身体を極めて繊細な感覚受容器として用いることで、自然環境に潜在的にある潤沢な情報を受信し、つまりは環境への身体の調和から、独自の運動言語を構築しようと試みている。

最新の委託振付作品『Interfacial Scale』(2013 年) は、コンテンポラリー・バレエ界の国際的名門ゴッテンブルグ・オペラ・ダンスカンパニーのために制作された。本作は、映画・ミニマルテクノなど幅広い分野で活躍する作曲家・半野喜弘氏に音楽を依頼し、11 人のダンサーとオーケストラのための作家初の大規模作品として上演された。また 2014 年 3 月には、次期パリ・オペラ座バレエ団芸術監督に任命されたベンジャミン・ミルピエ率いる L.A Dance Project のための委託振付作品『Peripheral Stream』（2014 年）をシャトレ劇場（パリ）で発表した。

「観客に未知の身体感覚を与えたい」という作家の意図に端を発して、2010 年頃からは、錯視と身体的没入感覚にフォーカスしたインスタレーション作品を発表しはじめる。主な作品に、あいちトリエンナーレにより委託された『Haptic Installation』(2010 年)、パリの Maison des arts de Créteil Exposition EXIT で初展示された『Holistic Strata Installation』（2011 年）、オランダ、アインドホーヴェンの Van Abbemuseum により委託された『split flow Installation』（2012 年）などがある。これら身体感覚を揺さぶるビジュアル・アートの数々と、ジャンル越境的な振付作品により、2010 年には国際的メディアアートの祭典アルスエレクトロニカ（リンツ）のデジタルミュージック・サウンドアート部門で入賞する。

Composing Holistic Sensations 1 - Artist's Thoughts by Hiroaki Umeda

1. Creative Principles ｜ 創作原理

世界のすべてはバーチャルであり得ると梅田宏明は話す。人の目が受信する光の信号は、脳に伝達され、情報処理され、言語認識に至るが、そのプロセスのどの段階を切断しても、リアリティとして指し示せるオブジェクトはあたりまえだが存在しない。人は複数の情報信号を集めては、ある個人、ある物体、ある風景としてそれを認識しているのだが、その情報の集合体に恣意的に実体を与えているのは、梅田によれば、じつは「人間の信念」でしかない。「人は自分が事実であると信じたいものをリアリティと名づけ、その信念が少しでも崩れればバーチャリティと変名する」。けれどリアルもバーチャルも、視覚的に分解すればすべて光の粒子でしかない。

東京のような大都市では、社会も情報も高速度で流れゆく。またその絶えざる変化に合わせて、価値観も容赦なく変容する。そのような流動化社会で育った梅田が信念の基盤として依拠したのが、言語でも、歴史でもなく、身体であったのは必然といえるだろう。梅田にとって身体とは「言語以前の言語、感情以前の感情が潜伏する場所」だ。言い換えるならここには、社会に適応した利便的な言語や感情の型に剪定されてしまうよりもまえの「原記号」が存在する。梅田は、このプリミティブかつ複雑な身体感覚をありものの言葉で簡易処理せずに、たびかさなる留保を重ねながら、精度高く観察し論理化していく。そしてこの言語以前のなにか、感情以前のなにかを「衝動 (impulse) 」と呼び、それを創作の原点に置く。

「衝動」は、創作の原点であるとともに目的でもある。梅田は、光・音・映像・身体など舞台上の異なる刺激物を、自分のなかにストックされた多彩な身体感覚に則して極めてロジカルに記譜していくことで、作品を介して、この衝動を観客とシェアしようと試みる。「観客に未知の身体感覚を与えたい」と作家は言う。つまり社会のなかで否応なく萎縮してしまった観客の感覚レセプターを、舞台上のエクストリームな刺激によって一時的に解放し「エモーション（感情）以前のセンセーション（五感）」を覚醒してみせるのだ。梅田にとっては、このような審美的体験こそが芸術の持つ社会的効力である。つまり言語化できぬほど強烈なセンセーションを身体を介して体験することによって、人はまだ見ぬ社会の姿に希望を抱き、未来を変える原動力を育むのだ。

前述したように、梅田によれば、世界のすべては細分化していけば光の粒子でしかない。あるいは、原子や陽子でしかない。そしてこのミクロな視座をそっくりそのままマクロな思考に反転させると、人も物質も自然も、あらゆるものは等価なマテリアルとして地球上で繋がっているとも言える。つまり梅田の発想では「人間は、石や蟻や鳥となんら変わらないただの物質の集合体」でしかない。なぜなら人を人たらしめているとされる、命や心や精神といったものは、やはり物的なオブジェクトとして確たる存在を持たないからだ。さらにいえば、あるとき鳥の群れがひとつの固体として認識できる瞬間があるように「人の固体としての境界線がどこにあるのかも定かでない」。そうなると、ある個人が、他の物質や生物の優位に立つ存在だと認識するのは不自然だ。そうではなく、人と物とは等価であり、固体と全体の境界は曖昧であるという発想を広げていくほうが、あらゆるものが地続きに繋がった「奢りのない世界」が見えてくる。よって梅田の作品では、ダンサーを上位に引き立てるために、他の舞台要素を下位に構成するようなことはなされない。逆にここでは、人は、他の物質や自然物と同じ位相で生きる存在であることが強調される。このいわば「脱人間中心主義」ともいえる梅田の哲学に支えられ、舞台上にはあらゆるものが美しく調和したホリスティック（全体的）な時空間が構築されていく。

Composing Holistic Sensations 2 - Artist's Thoughts by Hiroaki Umeda

2. Dance Method ｜ダンス理論

短期間ながらもバレエやヒップホップなど様々なダンススタイルを学んだ経験から、梅田は、あらゆるダンススタイルには「通底する運動原理」があることを認識した。相対的に思考が成熟した二十歳という年齢で本格的にはじめてダンスに触れたことが功を奏し、彼には表面的に異なるダンススタイルが、外見的に異なるファッションスタイルと同様、単に社会通念で色分けされたカテゴリーにしか思えなかったのだ。しかしその異なる装飾物の下には、ダンスとしての飾りをまとうよりも前の身体運動が確実に存在する。そこで梅田は、あらゆる上澄みのスタイルを排除して、その下層にあると思われる「運動原理」を追究し、その原理に基づいて「ムーヴメントのシステム」を構築していくことにした。これが「運動 (kinesis) 」を基礎言語に置きながら、特定の「スタイル」を超越した「システム」を目指す＜キネティック・フォース・メソッド＞の基本である。

キネティック・フォース・メソッドの習得は、三段階に分けられる。第一段階は、ニュートラル・ポジションで「立つ」こと。梅田によると、人が美しく立つためには二つの基礎運動原理をマスターする必要がある。あらゆる動きの土台となる「バランスの原理」と、あらゆる動きを生起させる筋肉の「緊張と弛緩の原理」だ。またキネティック・フォース・メソッドでは、バランスは三つのグラヴィティ・ポイントを制御することで成立する。腰の重心、胸の重心、足裏の力点だ。梅田は「この三点を完全に制御できれば、人が可能なすべてのスタンディング・ポジションは取ることができる」と断言する。なおニュートラル・ポジションとは、「足裏、腰、胸表面のそれぞれの中心部を、一本の軸上に重ねた状態」を言う。この軸が完全に体得できるようになると、おのずと次の緊張と弛緩の原理が把握できるようになる。つまり人体として最も自然なバランスが取れるようになることで、身体のあらゆる部位から不要な緊張が抜けていく。そして、最小限の動力で、最大可動域のムーヴメントを生成できるようになるのだ。

第二段階は、ナチュラル・フォースと調和して「動く」こと。キネティック・フォース・メソッドでは、重力、遠心力、反撥力といった自然界に存在するフォースに身体を調和させることから動きが生まれる。つまり人が環境を制御しようと能動的に働きかけるのではなく、環境にあるフォースを利用して受動的に動くのだ。「ブランコを想像すると分かりやすい」と梅田は言う。「ブランコは支点がしっかりしているから、腰掛け部分である動点に最小限の力を加えるだけで、美しい軌道が生まれる」。この極めて力学的な原理に示されるように、第一段階のニュートラル・ポジションを習得しておくことにより、ダンサーは重力などのナチュラル・フォースを物理的に美しく身体に通すことができるようになる。

第三段階は、それらナチュラル・フォースを応用した「流れ」を作ること。キネティック・フォース・メソッドでは、クラシック・バレエのように人間の意志で重力を制御した「ポーズ（停止）」を見せるのではなく、自然と調和した「フロー（流れ）」を生み出すことが優先される。そして不必要なノイズ（緊張、自意識）が入らない美しいフローを作るためには、人が司る「意識のリミッター」をいったん外す必要がある。「人体はこう動くものだ、という偏見を抜くこと」が重要だと梅田は言う。そして周囲にある自然のフォースを精度高く感知し、そのフォースに受動的に身を任せることで動きの流れを作っていく。このような人体への偏見を排除した方法論から、一見「インヒューマン（非人間的）」にも思われる梅田のムーヴメントは生成されていくのだ。

Composing Holistic Sensations 3 - Artist's Thoughts by Hiroaki Umeda

3. Choreographic Project 'Superkinesis' | 振付プロジェクト'Superkinesis'

生物学に「超個体 (Superorganism) 」という概念がある。これは多数の昆虫や動物などが集まり、蟻のコロニーや、鳥の群れなど、あたかも一つの固体のようにふるまう生物の集団を指す。梅田はこの概念にインスピレーションを受け、2009年、10年間に及ぶ振付プロジェクトである <Superkinesis> を始動した。Superkinesis（超運動）ではその名のとおり「身体だけでなく、光、音、映像などあらゆる運動体を超越的に組織化することにより、ひとつの巨大な生命体のような舞台空間を作る」ことを目指す。つまり梅田にとっては、舞台上のすべての「動き」が振付けの対象なのだ。

身体のみならず、空間のすべてを支える動きを振り付けたいと思うにはわけがある。梅田の考えでは、身体は空間の一部であり、人は自然環境の一部だからだ。より詳しく説くなら、作家のなかにはいわゆる人工美と自然美という二項対立が存在しない。そうではなく、あらゆる人工美は自然の産物だと捉えている。この思考を演繹するなら、梅田にとっては人という高度に文明化した生きものさえも一つの自然物である。よってダンスにおいても人は、自分の能動的な力だけで「身体という環境」を支配下に置こうとするのではなく、受動的に自然と対話する方法を探るべきだと梅田は言う。「例えば猫のような動物が、身のまわりの自然環境と調和することで極めて機能的でかっこいい振る舞いを習得しているように、人も環境に身を委ねれば、人本来が持つ人らしい美しい動きが生まれてくるはずだ」。
つまり梅田の考えによれば、人の動きの発生は自然によって促され、人の動きに先立って環境が存在するのだ。こうしたホリスティックな哲学に起因して、おのずと梅田は自身の振付プロジェクトにおいて、身体のみならず空間のすべてを振り付ける試みにでたわけだ。

具体的に本振付プロジェクトは、三期の実験段階に区分される。第一期は「動き」の開発。コンテンポラリー・ダンサー、ヒップホップ・ダンサー、バレエ・ダンサーといった異なる身体を保持する踊り手にキネティック・フォース・メソッドを適応させた際に派生するであろう多様な動きのボキャブラリーを探求していく。第二期は「システム」の開発。複数人のダンサーが舞台上に立ったとき、それら異なる身体が同一空間で共有可能な全体性をリサーチしていく。この全体性を生みだす要素には、呼吸、リズム、動きの速度、動きの部位の統一などが例としてあげられる。つまりこの段階では、複数人のダンサーで共有できる「時間」を振り付けることが重視される。第三期は「秩序」の開発。前段階までのリサーチで既にあるシステムを共有した複数人のダンサーたちに、さらに光、音、映像などの振付マテリアルを重ねた際に生まれてくるであろう空間全体の秩序を解明していく。

なお、便宜上、リサーチは三段階に分けられているものの、動き、システム、空間秩序の開発は、少なからずすべてのフェーズにまたがり行われている。舞台上のすべての動き――物的変化・時間変化・空間変化――を、振り付けることによりひとつの大きな秩序を誕生させようとする本プロジェクトは、2014年２月現在、第二期まで進行している。

Composing Holistic Sensations 4 - Artist's Thoughts by Hiroaki Umeda

4.Technology and Visual Installations | テクノロジーとインスタレーション

あらゆる「動き」は等価な振付要素である。ならば身体以外の動きのみで構成される振付作品があっていいはずだ。既存の芸術分野に束縛されないこうした自由な発想から、梅田は、2010年頃からビジュアル・インスタレーションを創作しはじめる。

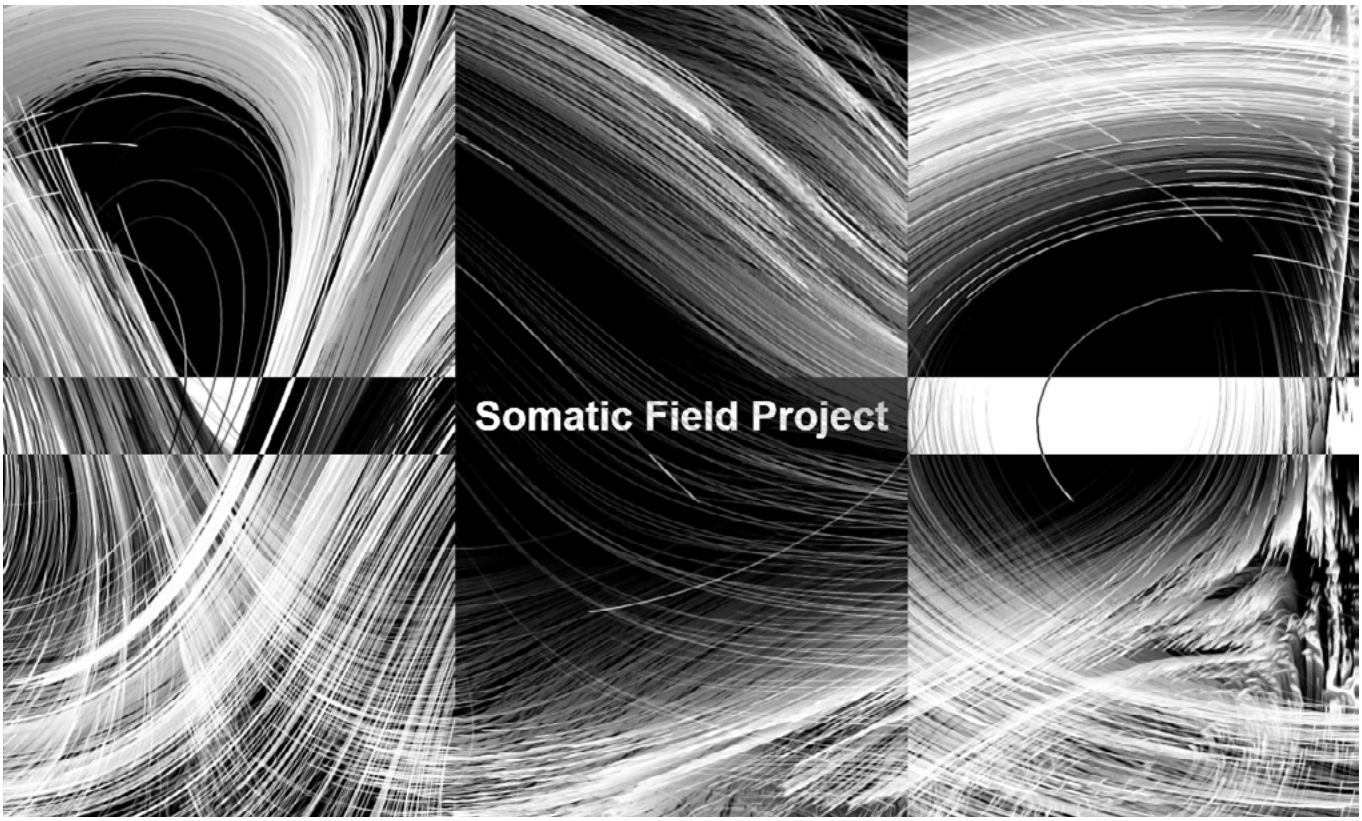
言語以前の言語、感情以前の感情である「衝動 (impulse) 」を観客に体感させることが作家の目的であるならば、なにもそこに身体メディアが介在する必要はない。もちろん、身体と身体がコンフロントすることで観客が受信する情報量の多様さは、パフォーミング・アートならではの豊かさであり、梅田もその豊かな可能性を信じている。しかし逆に、舞台芸術の表現としてのデメリットもある。例えばダンス作品を鑑賞する際、観客は舞台上にある無数の光の粒子を統合し、それを人の動きとして認識し、その動きをある概念として脳内でまとめようと試みる。つまり梅田の言葉を借りるなら、舞台作品は鑑賞形態として極めて「言語認識に近いまどろっこしいプロセス」を踏むのだ。しかしインスタレーションではこの煩わしい鑑賞プロセスを省略できる。インスタレーションでは「光を光、音を音として、その刺激を観客の身体にダイレクトに与えられる」のだ。この直接性を有効利用するために、梅田の創作するインスタレーションは、観客の視覚を混乱させ、聴覚の限界を冒し、平衡感覚を揺るがすような、脳で解釈する時間的猶予が与えられないほど身体に直に響く作品が多い。今後は触覚などほかの感覚器官を利用した創作にも挑戦したいという。

テクノロジー・アートとコンテンポラリー・ダンスを融合してみせた作家として、梅田宏明を認識する人は多いだろう。そして、それは間違いではない。しかし作家本人によると、自作でテクノロジーを利用することは決して必須条件ではないという。また、いわゆる最先端のテクノロジーを利用しているわけでもないという。ではなぜ梅田の作品からは、他のダンス作品ではあまり見られない、デジタル・テクノロジーにアップ・トゥ・デートな感覚が与えられるのか。梅田の説明によればそれは「思考が、テクノロジーの進歩に合わせて刷新されているから」だという。

梅田によると、新たなテクノロジーがいくら生まれても、旧式のリアルの「再現」にそれを用いていては意味がない。例えば最先端の音響機器を用いてクラシック音楽をいかに本物そっくりに「再現」するか、といったことには梅田はあまり興味を示さない。そうではなく、もし今までにない音響機器が誕生したとするならば、その機器でしか「実現」(再現ではなく)できない音の可能性を追求する。あるいはその機器でしか実現できない解像度の世界を探求する。つまり梅田の考えでは、質実ともにテクノロジーにアップ・トゥ・デートな作品を創造するためには、なによりも作家本人の思考を最先端の技術に合わせて刷新することが求められる。テクノロジー・アートの豊かな未来は、テクノロジーそのものの革新以上に、テクノロジーが提示してくれる方法論に合わせて作家の思考がアップデートされていくことにあるからだ。だからこそあくまでも梅田の場合は、テクノロジーに先行して目指すべき明快な世界感があり、それを実現するために必要最低限のデジタル・テクノロジーのみを利用していく。

なお梅田のダンス作品では、主に二つの理由でデジタル・テクノロジーが採用されることが多い。第一には、「世界の解像度を上げる」ため。例えばデジタル技術を用いると、空間的に1ピクセルの細やかさまで解像度を上げて構成することができる。また時間的にも人の可聴領域を越える精度まで音の伸縮を制御することができる。「その精密に構成された時空間でのみ実現可能な審美性があるはず」と梅田は語る。第二には、「身体認識のスケールを拡張／縮小させる」ため。例えば舞台上の身体の動きをセンサーで取得し、それをリアルタイムに後方のスクリーンに投影すれば、自分の身体ひとつで司れるスペースが拡張した感覚を抱くことができる。また精密機械でしか描けないような細やかなラインを舞台上の身体がまとうとしたら、身体認識のスケールがミクロな方向に縮小していく。「デジタル・テクノロジーの誕生によって、身体の感覚が変容している」と梅田は言う。そして、その変容を既知のヒューマンな身体概念にそぐわないものとして拒絶するのではなく、それこそが現在進行形のヒューマンな身体だと受容し、分析し、論理化することにより、梅田は最先端のテクノロジーと美しく調和した芸術作品を創造していく。

Somatic Field Project



Somatic Field Project

《Somatic Field Project》は、梅田宏明が日本の若手ダンサーの育成と、自身のムーブメント・メソッドの 発展を目的として2014年に開始した長期リサーチプロジェクト。
ダンサーの長期的なトレーニングと、様々なアーティストとのコラボレーション等を通して、さらなる進展を目指す。

< コンセプト >

ムーブメントのリサーチと実験、及び世界的に共有できるメソッドの確立。
トップレベルのダンサーの育成。

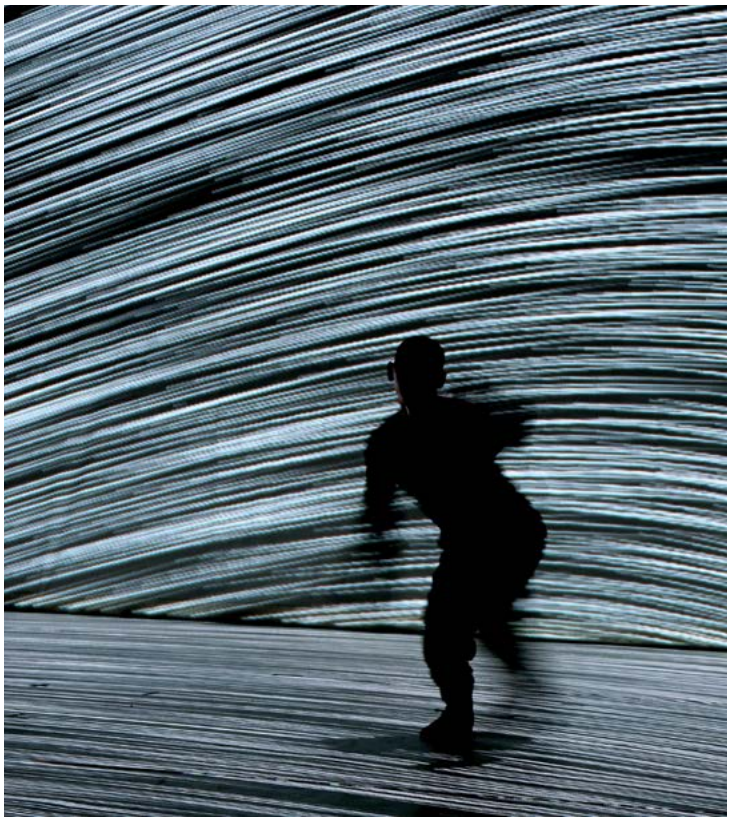
< 活動内容 >

Kinetic Force Methodのワークショップ。
ムーブメントのリサーチと実験をベースにした作品製作と上演。
国内、国外のダンサー・振付家によるワークショップ、及び共同製作。
他のジャンルの作家、研究家との共同製作。

Somatic Field Project
http://hiroakiumeda.com/somatic.html

Facebook - Somatic Field Project
https://www.facebook.com/somaticfieldproject

Solo Works



Intensional Particle

(2015)

振付・出演: 梅田宏明

イメージ・ディレクション: S20

ビジュアルリサーチ: Ludovic Burczykowski

イメージ・プログラミング: Shoya Dozono

ビデオ・エディット: Guillaume Gravier

サウンド・ライティングデザイン: S20

製作: S20

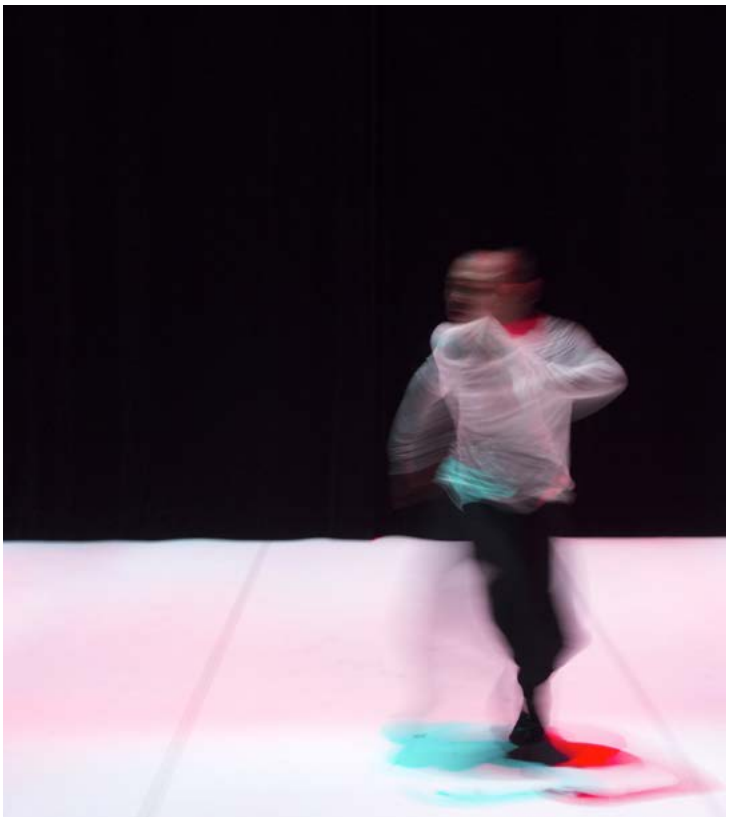
共同製作: Le Manège – Scène Nationale, le manège.mons, la Gare Numérique – Jeumont, la Maison des Arts de Créteil, Stereolux – Nantes, Mapping Festival – Genéve

スクリーンに映る水平線が、わずかに震える。すると内部に隠されたエネルギーが放出されるかのように、瞬間的に、一本線が複数線に倍加される。同様に、舞台に立つ梅田が身じろぐと、身体に宿る潜勢力が、腰椎から脊柱から腕を伝い、太陽のコロナのような曲線を描く背景の電子画面へと伝播されていく。遠目には安定した形状を保つように見える滝や川のような存在も、微視的にフォーカスすれば、実は、うねり、波うち、渦巻き、逆流といった不断の流動の繰り返しで形成されている。こうした考えに則り本作で梅田は、パーティクルを「静的な粒子」としてでなく「動的な質点」として捉え、その質点が密かに宿す「インテンショナルな(内包する)フォース」を空間に可視化する。

舞台上では、身体の、光の、音のフォースが関数的に掛け合わされ、あるときエネルギーの臨界に達する。だがその極限状態も相転位を経て、再び、つかの間の安定状態へと戻る。固体の融解、液体の昇華、あるいは熱伝達のアルゴリズムを思わせる映像は、すべて無機的なパーティクルで表現され、絶妙に梅田のムーヴメントとシンクロして動く。結果、目のまえの空間全体が巨大な生命体のように踊りはじめる。

観客が体験するのは「不安定な安定」だ。そこに存在する激流線は一分後には消滅し、確かにある光の瀑布は次の刹那に霧消する。よってステージ上には爆発的な曲線の画布が誕生しながら、それはどこかフラジャイルな印象を与える。刹那の安定を保つべく駆動しつづける光の構造物のなか、消えるさだめを持つ身体表現が埋めこまれることで、観客は次第に、目にするムーヴメントのすべてが、一瞬後には跡形もなく消えてしまうことに気づかされる。本作の創作哲学を体現するかのように、ここでは見えないフォースが可視化され、見える世界は消失する。ただ観客のなかにはいつまでも、情報の臨界を越えて熱を帯びた体感が残りつづける。

Solo Works



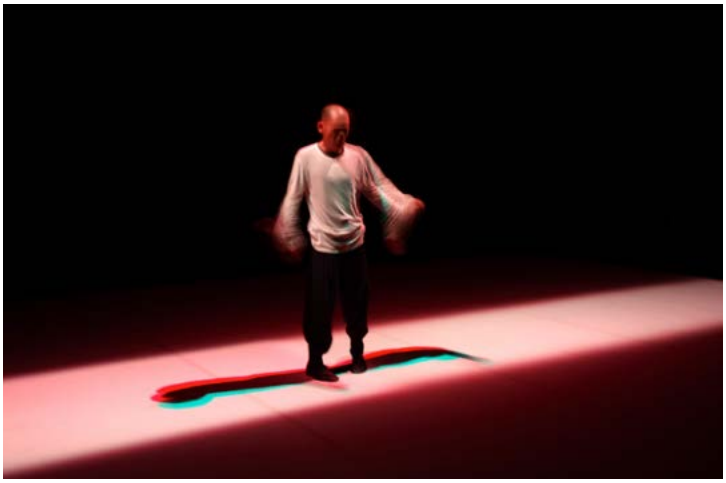
split flow

(2013, 2014)

振付・出演: 梅田宏明
サウンド・ライティングデザイン: S20

製作: S20
共同製作: Théâtre Louis Aragon, scène conventionnée danse de Tremblay-en-France, Stereolux – Nantes

「分断された流れ」という意味の本作では、動的状態と静的状態、二つの異なる状況から生まれる二重の現実を見せることをテーマに取る。2011年、オランダ(アインドホーヴェン)の Van Abbenmuseum により委託制作された同題のインスタレーションでは、高輝度レーザー機器を使用して、青色、赤色、緑色(光の三原色)を同時に高速投射することで床に複数の白色光線を可視化。鑑賞者がその静的(スタティック)な光の空間を通りぬけることで、白い光は瞬間的に三色に分断される。つまり空間への身体による動的(ダイナミック)な干渉により、初めて異なる現実が出現することを提示してみせた。



梅田はこのインスタレーションのコンセプトを、同題のソロダンス作品にも採用しつつ、新たなダンス言語の構築に挑む。速度、強度、スケールの異なる多種多様な小さなムーヴメントを全身に無数に埋めこみながらも、同時に、冒頭から終わりまで決して途切れることのない、なめらかなダンスフローを表現してみせる。つまり本作では、微視的な情報量に満たされた「分断された現実」と、ゆったりとしたマクロ時間が流れる「継続する現実」の、二重のリアリティが同時に体感可能である。さらに観客は、梅田の身体という豊かな媒体物を介して、空間全体が、水、油、空気、といった異なる質量のメディアによって構成されているような錯覚を覚える。豊穣な動きによってのみ可視化される現実があることを『split flow』は見せてくれる。

Solo Works

Holistic Strata

(2011)

山口情報芸術センター［YCAM］委嘱作品

振付・出演： 梅田宏明
イメージ・ディレクション： S20
イメージ・プログラミング： S20、比嘉了、大西義人
システム・デザイン： 比嘉了、大西義人
サウンド・デザイン： 濵哲史 (YCAM) 、S20
ライティング・デザイン： 高原文江 (YCAM) 、S20
衣裳： 片山涼子
センシング・エンジニア： 大西義人、大脇理智 (YCAM)
ビデオ・エンジニア： 大脇理智 (YCAM)
テクニカル・コーディネーション： 岩田拓朗 (YCAM)

脱人間中心主義を標榜する梅田宏明の作品群では、身体も光も音も、あらゆるものは等価な物質として存在する。本作ではそれら構成物質のすべてを、高抽象度なワンピクセルの点に分解。舞台上で展開される全運動を最小単位の点に還元することで、あらゆる運動体の背景に通底するであろう「動きの原理」を追究していく。稲妻、雨水、竜巻など自然界に存在する様々な非線形現象を連想させる粒子群のムーブメントは、ときに人体センサーを装着した梅田の身体言語に連動し、その構造を漸次的に変えていく。ピクセル群の渦中に立つ梅田の身体は否応なく自然環境に影響を受けると同時に、彼の身体部位の動きひとつが世界全体に影響を与えていく。「個体の層が全体の層に影響を与え、全体の層が個体の層を生成する」。世界の決定因子は「個体と全体の双方に備わる」という作家の哲学に支えられ、あらゆる運動体が超越的に組織化されたホリスティックな生命体が誕生する。動くものすべてが無数のピクセルにより表現される美しい調和世界に身を浸すことで、観客はエモーション（感情）以前のセンセーション（感覚）を覚醒されることになる。

Solo Works

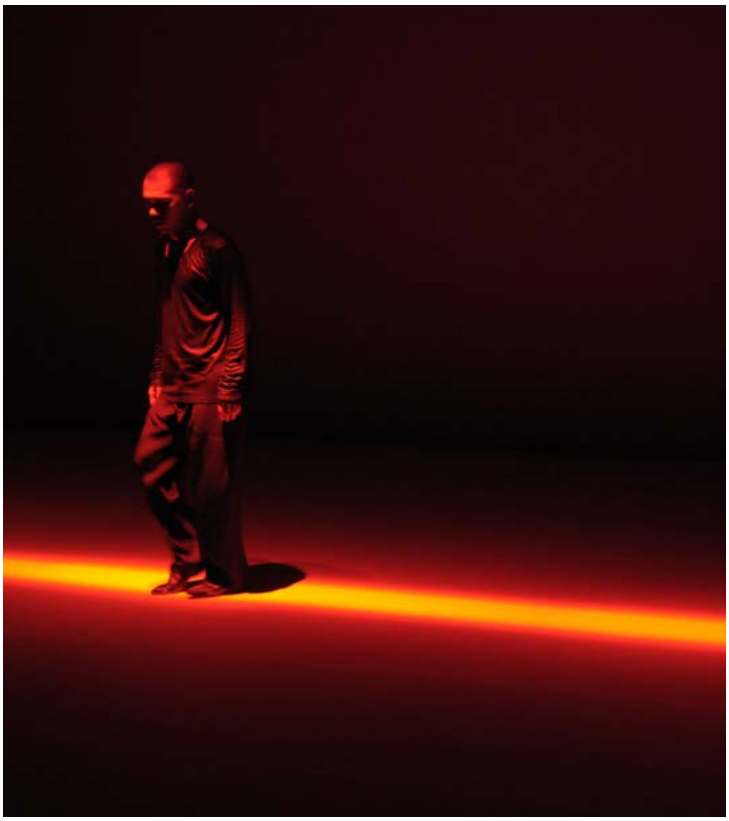
Haptic

(2008)

振付・出演: 梅田宏明
サウンド・ライティングデザイン: S20

製作: S20
共同製作: Théâtre de Nîmes, Festival d'Automne à Paris

special thanks to Hervé Villechenoux



人の目に存在する何億という視細胞。あらゆる光刺激はここで吸収され、たった3種類のレセプターの出力比により何百もの色調信号へと変換される。梅田宏明によれば色彩とは、音、匂い、温度などと同様「人体が受容する刺激物のひとつ」でしかない。つまり色は環境にあらかじめ固定化されて存在する物体ではなく、「刺激物としての光」が受容器である網膜に受け止められることによって初めて、赤、緑、青、という色光の三原則を掛け合わせた色としての認知に至るのだ。今までモノクロ表現に特化してきた作家は、この「目で受容する触覚刺激」の可能性を追求すべく、本作で初めて大胆な色彩パレットを採用する。舞台上には過激ながらもエレガントに洗練された色味のスペクトルが展開され、その色調変化にあわせてムーブメントの質感も、ときに野性的に、ときにロボティックに、次々に変容していく。観客は暴力的な色彩の洪水にさらされ、視細胞は絶えまなく発火しつづける。ほぼ不可視な薄暗闇から、情報過多な色彩の衝突まで。光の受容器としての人体の限界に迫る。

Solo Works

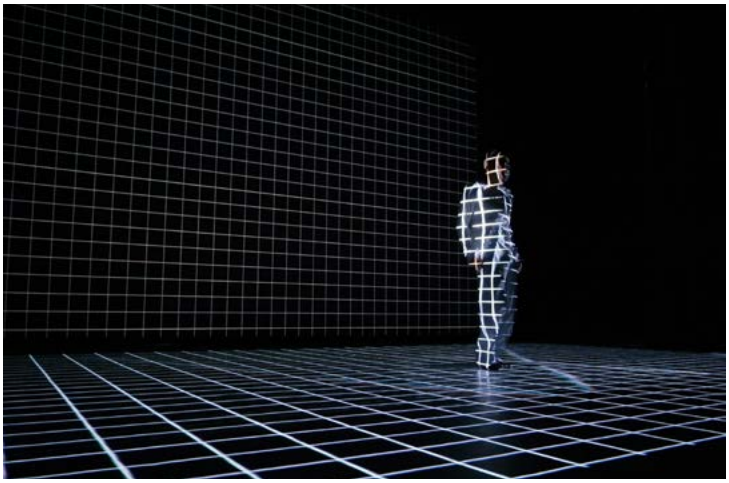
Adapting for Distortion

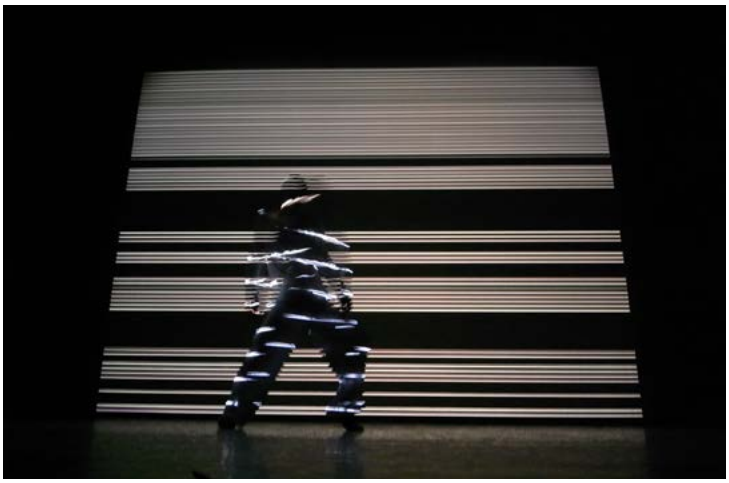
(2008)

振付・出演: 梅田宏明
サウンドデザイン: S20
イメージデザイン: Bertrand Baudry, S20

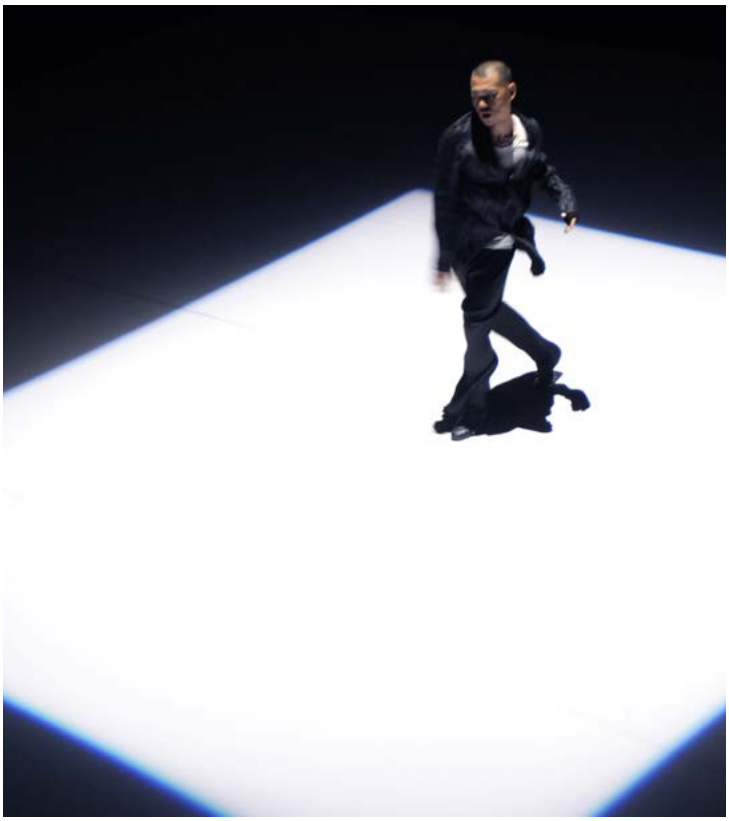
製作: S20
共同製作: Le Studio – Le Manège, Scène Nationale Maubeuge, Romaeuropa Festival

前作『Accumulated Layout』で、光の意匠を変えることで異なる質感のムーブメントを届けられることを実感した梅田は、本作でさらに視覚認識についての研究を推し進めていく。ここでは複数台のプロジェクターを利用して、背景、床、ダンサーの身体左右に、それぞれ異なる速度で動く垂線、平行線、斜線が投影される。それら無数の線分が明滅し、交差することによって生まれる錯視効果により、幾何学的な空間で行われる梅田のダンスは視覚的に歪められていく。例えば、背景に投影されるグリッド幅の拡張に反比例してダンサーの身体は収縮し、また、ダンサーの身体に投射される格子模様のサイズ変化に応じて背景の遠近感が歪んでいく。なお、本作のタイトルには「二重の錯視」の意味が込められている。人には、適切な社会生活を送るために現実の歪みを都合よく直してしまう補正能力が備わるが、その補正機能が働くことにより逆説的に、実際の現実を歪ませて認知してしまうという欠点があぶりだされる。つまり、人は歪みを補正することで、歪んだ現実を認識しているのだ。本作ではこの倒錯した情報受容プロセスを体感してもらうべく、多様な錯視パターンを組み合わせ、観客のニューロンレベルの言語に語りかけていく。果たして、人の目は正しい現実を見ているのか。すべては虚構ではないのか。視覚認識のリアリティが問われていく。





Solo Works



Accumulated Layout

(2007)

振付・出演: 梅田宏明
サウンド・ライティングデザイン: S20

製作: S20 with La Chaufferie
共同製作: Théâtre national de Chaillot

舞台上の光の強弱、明暗、遅速、屈折角度を精巧にデザインすることで、梅田はここで、観客の視覚認識に計算された変化をもたらすダンス作品を創作した。「蓄積された配置」という題名を持つ本作では、複数の時間的なセグメントごとに光の配置がわずかずつ変わり、その変化に応じてダンスの質感も変容する。ある一場では、静かに溶暗する光のなかで凶暴に腕の速度を増すムーブメントが展開され、他のある場ではクリアな光に晒されて身体運動が機械的に停止する。「照明とダンスが不即不離に絡みあう、刺激の配列パターンをシーンごとに構成した」と梅田。時間の経過につれて観客の身体には、様々な刺激パターンが強烈な残像と共に蓄積されていく。

Solo Works

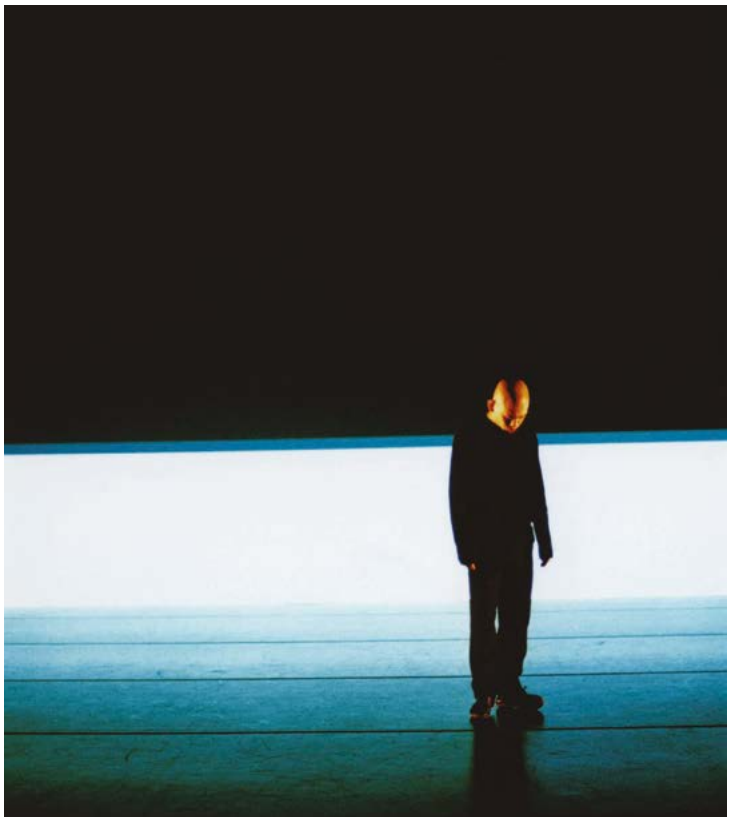
Duo

(2004, Recreation 2007)

振付・出演: 梅田宏明
サウンド・ライティングデザイン: S20

仮想空間と現実空間、二つの異なる位相に二人の梅田宏明が立つ。極めて無機質な表情の彼らは、まずは完璧に制御された機械運動のようにポール・ド・ブラを繰り返す。そして徐々に熱量と速度を増していき、躍動感のある電子音に乗りながら脱構築的なヒップホップを展開しはじめる。電子空間で踊るアバターは、ときにバスの重低音に乗って激しく横揺れしたかと思えば、破壊的な電子音と同期して無数のピクセルに分解される。バーチャルイメージが氾濫する現代社会における人間の身体性の意義に疑問を持った作家は、ここであえて映像と生身の身体を併置してみせる。そしてリアルタイム映像技術を使用することで、ほぼタイムラグなく同質のムーブメントを展開する二人のダンサーを観客に提示する。一方には可能で、他方には不可能な、ムーブメントやエフェクトとは何か。生身のダンサーと仮想のダンサーのデュエットから検証する。

Solo Works



while going to a condition

(2002)

振付・出演: 梅田宏明
サウンド・ライティングデザイン: S20

光、音、映像、身体――あらゆるエレメントをハイブリッドに融合することで「特定のエネルギー状態にある絵」を舞台上に現前化させる梅田宏明の創作哲学は、実質的な処女作である本作で早くも確立されている。写真芸術からダンスに転身した梅田のなかには、「ダンスをグラフィックアートとして平面的に見せたい」というビジョンが当初からあり、その構想を反映するかのようにここでは、速度感を持って明滅するエレクトロニックな光の画布が空間に配置される。作家が「周辺野で見る映像」と呼ぶこの幾何学的で抽象的なモノクロイメージは、ときに原始的律動感を帯びるデジタル生成されたドラムサウンドと同期し、ときに舞台中央に位置する梅田の優雅で躍動的なムーブメントとシンクロナイズしながら、時間経過とともに急激な上昇線を描き、空間全体のエネルギー値を極限状態まで高めていく。また舞台中央に「立つ」という極めて日常的な動作から始動する梅田の身体は、ある瞬間、既知の身体状態を超越し、未知のアウラをその身体から放出しはじめる。日常から非日常、そしてまた日常へ。終わりなく変容しつづける異なる身体状態を、観客は体感する。

Superkinesis - Choreography Project

4. temporal pattern

(2013)

振付: 梅田宏明
ダンス: Hema Sundari Vellaluru, Nget Rady (Amrita Performing Arts), Yu-Jung CHENG
サウンド・ライティングデザイン: S20
イメージディレクション: S20
イメージプログラミング: 堂園翔矢

共同委嘱: National Chiang Kai-Shek Cultural Centre, Taiwan and Esplanade – Theatres on the Bay, Singapore

企画: 愛知芸術文化センター; Esplanade – Theatres on the Bay, Singapore; National Chiang Kai-Shek Cultural Centre, Taiwan; S20, Japan

<Superkinesis> の第一段階では、異なる背景を持つダンサーに自身のメソッドを移植した際に生まれる「動きのボキャブラリー」の開発に焦点が当てられた。本作から開始される実験第二段階では、各ダンサーから生まれるボキャブラリー以上に、複数のダンサー間から立ち上がる「システム」の可能性を追求していく。とはいえ梅田は、この全的な統一感を生み出すために、ダンサーたちを視覚的なユニゾンで束縛するようなことはしない。そうではなく振付家は、台湾、インド、カンボジア、という異なる出自を持つダンサーたちに、各国の伝統舞踊の型を保持してもらったうえで、「呼吸」のみ統一するよう指示を出す。つまり「動き」ではなく「呼吸」のリズムとスピードを緻密に振り付けることにより、見た目には大きく異なる三者の踊りから、質的な統一感を感じさせる「temporal pattern」（時間的配列）を提示していくのだ。さらに梅田は、密度と速度の異なる幾何学的なグリッド線を空間に乱反射することにより、この時間的な統一感に絶えず揺さぶりをかけつづける。つまりダンサーの個体、あるいは三人のダンサーの集合体を「一個の統一体」として捉えようとする観客のパーセプションに水を差す分断線を挿入していくのだ。異なる文化的背景を持つ三者は身体的差異を抱えつつ、同じ時間的配列を共有するため、メカニカルな統一体として規律化されることはない。<Superkinesis> は、より汎用性の高い振付システムを目指す試みであると同時に、より多様な生を認める自由度の高い社会システムを振り付けから志す。

Superkinesis - Choreography Project

3. isolation

(2011)

振付: 梅田宏明
ダンス: Lucia Albini Ana Campos Calvo Maud de la Purification
サウンド・ライティングデザイン: S20

製作: S20, Hebbel am Ufer, Berlin
共同製作: Tanzhaus Düsseldorf, Tanzquartier Wien

頭頂から爪先にいたる身体部位を直線的に連ねて、秩序を保つのがバレエの古典美学だ。梅田は振付プロジェクト第三弾となる本作で、天へと伸びる直線の秩序性が修練により第二の自然となったバレエダンサーたちの身体を、頭、胸、腰、膝、足首、と細分化し、各部位に「分離 (isolation) 」の亀裂を挿入していく。梅田はアイソレーションを「緊張と弛緩を認識し、自在にそれを操るテクニック」と定義する。例えば、全身を弛緩させ片方の肩にトリガーとなる力を加えることで、肩関節から先だけで軟体動物のような曲線をつむぐ。あるいは逆に、全身を固めて首から上を弛緩させることで、重力に任せきった頭部で自在に円を描く。アイソレーションは、梅田の構築したキネティック・フォース・メソッドの基礎技術のひとつ。この技術を、西洋舞踊言語を獲得する以前の身体の基層にまず徹底して叩き込むことで、あらゆる身体語彙が出尽くし、その配列で遊ぶ余地しか残されていないとみなされているダンスに、いまだ無限の語彙群が潜在することを実証する。白光に照らされるダンサーたちは、一見、人工交配された変異種のよう。しかし異様で優雅な曲線を描くその生物を入念に観察しつづけていると、直線の秩序性を保つことを至上命令とするバレエこそが人工的な言語なのでは、と逆説的な思いも湧いてくる。つまり梅田はここでバレエのように極度に体系化された舞踊言語に身体をアダプトするのでなく、身体の個人差を認めたうえで、差異の基底にある普遍性から新たな語彙群を開発する。この果敢な挑戦の彼方から、個を活かし、億兆の他と共生する、現代情報社会の驚異的な進化に適した舞踊言語とシステムが出現する。

Superkinesis - Choreography Project

2. repulsion

(2010)

振付: 梅田宏明
ダンス: Daravirak Bun, Guillaume Yvener, Sofiane Tiet
サウンド・ライティングデザイン: S20

製作: Théâtre de Suresnes Jean Vilar – Suresnes Cité Danse 2010
共同製作: Maison de la Musique de Nanterre, France

ストリートダンスとの審美的な融合を試みるコンテンポラリー・ダンスは近年多く見られるものの、社会的文脈や大衆的な装飾性を排して、ヒップホップの「機能的な動作性」のみに特化した作品はそう多くない。梅田は振付プロジェクト第2弾となる本作で、あらゆるスタイリスティックな装飾を剥がしたのちに、ヒップホップ・ムーブメントの基礎組みとして残る、「反撥力 (repulsion) 」に光を当てる。反撥力はまた、キネティック・フォース・メソッドを構成する動作のひとつでもある。振付家は、自身のメソッドとヒップホップ、双方の基層で同じ動作システムが機能する点に着眼し、このシステムを徹底的に追究すべく、速度、強度、振幅の異なる様々な反撥力を三人のヒップホップダンサーの身体にあてがっていく。「型」ではなく「力」を振り付けられたダンサーたちは、個別の身体性から不可避的に生じる繊細な揺れを残しながらも、全員が共有するフォースである反撥力をダイナミックに視覚化していく。三者三様のダンサーの肉体を借りて舞台上に抽出されるのは、華美なヒップホップの個性や装飾の基層に宿る「純粋な反撥力」だ。

Superkinesis - Choreography Project

1. centrifugal

(2009)

振付: 梅田宏明
ダンス: Satu Rekola, Milla Koistinen, Natsuko Kuroda
サウンド・ライティングデザイン: S20

製作: S20, ST Spot Yokohama Red Brick House, 2009

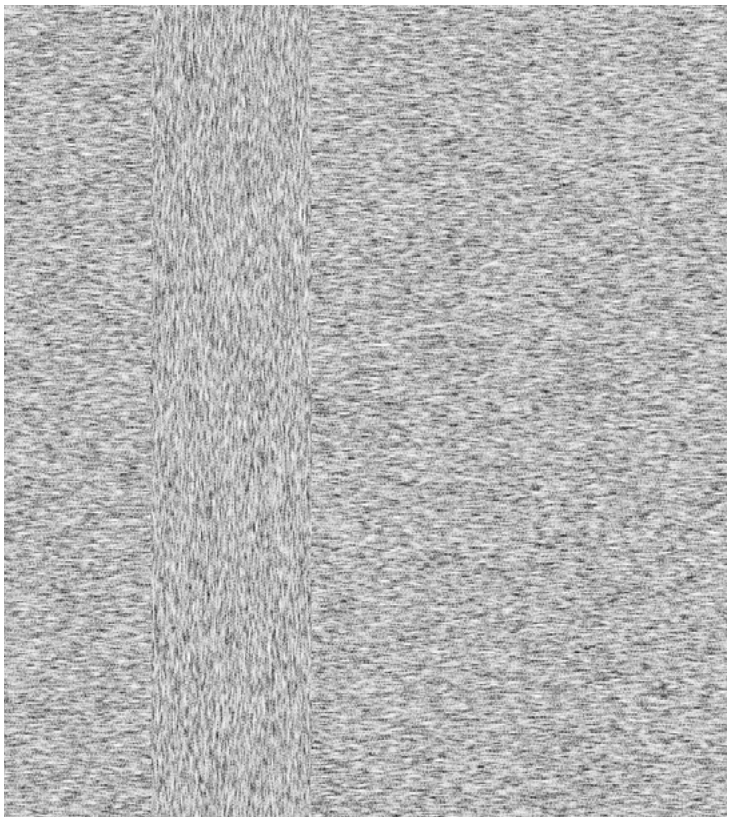
振付プロジェクト <Superkinesis> の処女作となる本作では、キネティック・フォース・メソッドの基本原理である「遠心力 (centrifugal force) 」に徹底して焦点があてられる。コンテンポラリー・ダンスの基礎訓練を受けた女性ダンサー３人が、腰、腕、首、上半身、といった身体の部位をナチュラル・フォースに身をあずけて回転させ、漸次的に回転の可動域を広げていくことで、最終的には、身体が単なる回転物のように見える「身体がオブジェクト化した段階」にまで速度を高めていく。とはいえ梅田はダンサーを機械的に制御したいわけではない。むしろ彼は、外的なフォルムを形式的に統一するのではなく、内的なフォースを繊細に感知してもらうことにより、ダンサーに三者三様のムーブメントの構築を許す。そうした動きの差異をあえて許容することにより、逆に、その差異の基底部に潜む類似性としての遠心力の存在を観客に気づかせるのだ。意識のリミッターを解除したダンサーの身体は、ループする無機的な音に同調して、縄のように撓りながら、危険閾値まで回転しつづけていく。

Visual Installations

kinesis #1 – screen field

(2013)

ディレクション: 梅田宏明
サウンドデザイン: S20
イメージディレクション: S20
イメージプログラミング: 大西義人、堂園翔矢
ビデオ・エディット: 安藤生時
製作: S20
共同製作: Théâtre Louis Aragon, scène conventionnée danse de Tremblay-en-France, Cinéma Jacques Tati



Visual Installations

split flow Installation

(2011)

GLOW 2011（オランダ・アインドホーヴェン）にて発表。

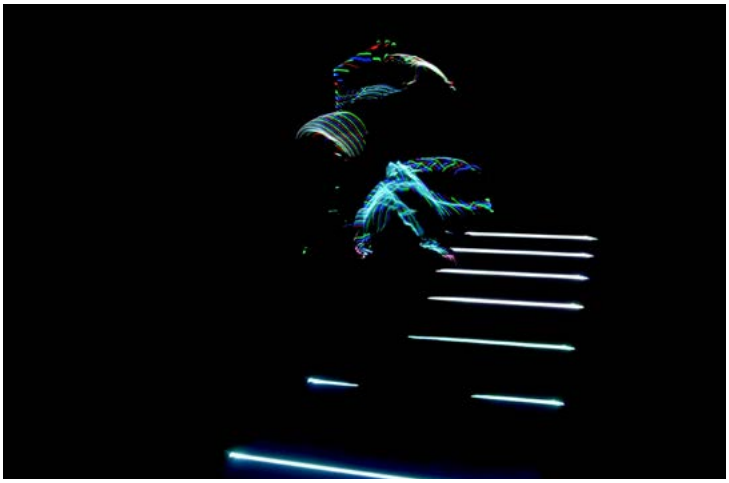
委嘱: Baltan Laboratories and the Van Abbemuseum
ディレクション: 梅田宏明

Festival GLOW　http://www.gloweindhoven.nl

Baltan Laboratories　http://www.baltanlaboratories.org

Van Abbemuseum　http://vanabbemuseum.nl

「分断された流れ」という意味の本作では、動的状態と静的状態、二つの異なる状況から生まれる二重の現実を見せることをテーマに取る。2011年、オランダ（アインドホーヴェン）の Van Abbemuseum により委託制作されたこの映像インスタレーションでは、高輝度レーザー機器を使用し、青色、赤色、緑色（光の三原色）を同時に高速投射することで床面に複数の白色光線を可視化する。鑑賞者がその静的（スタティック）な光の空間を通りぬけることで、白い光は瞬間的に、三色に分断される。つまり空間への身体による動的（ダイナミック）な干渉がなされることにより、初めて異なる現実が出現するのだ。動くことによってしか可視化されない現実が存在することを、梅田はここでエレガントに立証してみせる。



Visual Installations

Holistic Strata Installation

(2011)

ディレクション: 梅田宏明
イメージディレクション: S20
イメージプログラミング: S20、比嘉了、大西義人
システムデザイン: 比嘉了、大西義人

http://expoparanoia.wordpress.com/2011/05/27/hiroaki-umeda-holistic-strata-version-installation/

梅田宏明によれば、すべてのムーヴメントはワンピクセルの点で表象可能だ。稲妻であれ、噴水であれ、竜巻であれ。その動きを最小単位のミクロなデータに解析すれば、人の想像ではおよびもつかないほど複雑かつ緻密に洗練されたムーヴメントが浮きぼりになってくる。左右、前方、床面の巨大スクリーンに、そうした自然界に存在する美しい非線形現象を思わせる無数のピクセル群を投影する本作で、作家はまずなにより、観客の身体を全方位から降りそそぐ光刺激によってすっぽり包みこんでしまう。そうした緻密にプログラミングされた刺激空間に観客を招き入れることで、ときに強引に、またときに繊細に、彼らの身体に足下から揺さぶりをかけていくのだ。言い換えるなら梅田はここで、縦横無尽に高速移動する粒子群を精巧に「振り付ける」ことにより生まれる莫大な刺激を、観客の身体によってダイレクトに受容してもらうことをねらう。つまりこの没入型インスタレーションの客は、鑑賞者である以上に体験者であり、さらに言えば「コレオグラフされた空間」の体験者なのだ。

Visual Installations

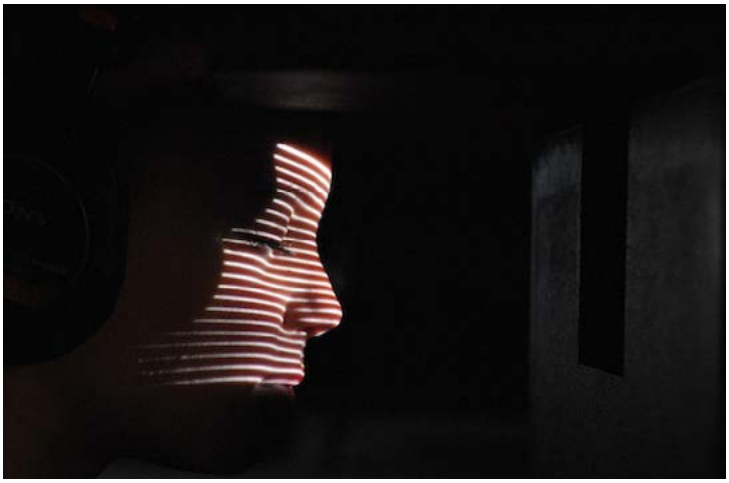
Haptic Installation

(2010)

ディレクション: 梅田宏明
サウンド・イメージデザイン: S20

http://vimeo.com/25355324
http://expoparanoia.wordpress.com/2011/05/27/hiroaki-umeda-holistic-strata-installation-haptic-version-installation/

「色は触覚刺激のひとつである」という思考に基づき創作されたダンス作品『Haptic』(2008)では、舞台上にエクストリームなカラーパレットを展開することで、「光の受容器としての観客の身体」の臨界点に迫った。同根のコンセプトから生まれた本作で、梅田はさらに「色を身体的に受容する行為」を追究する。通常、目を瞑れば世界は闇だ。しかし鑑賞用の小さな暗室に誘導される観客は、約2分30秒、目を閉じて映像インスタレーションと向きあいながらも、不思議にもまぶたの向こうにモノクロあるいはカラーの直線をくっきりと眺めることに。つまり装着したヘッドホンから響く暴力的な電子音にあわせて明滅するグリッド線を、まぶたを閉じた状態のまま、光刺激としてフィジカルに受容することになる。目を閉じて見るという、ある種、矛盾した鑑賞体験をくぐり抜けた観客は、自分がいまなぜ闇のなかで光を見たのかと自問し、その「認識」と「体験」のずれに眩暈を覚えていく。なお、観客に「身体的な色覚行為」を与えるという意味で、作家はこれをダンス作品として捉えている。あいちトリエンナーレにより委託製作された本作は、白黒バージョンとカラーバージョンが同時展示された。



Collaborations

Commissioned by L.A. Dance Project
Peripheral Stream

(2014年、L.A. Dance Project委託作品)

振付: 梅田宏明
ダンス: Julia Eichten*, Morgan Lugo, Nathan Makolandra, Rachelle Rafailedes
サウンドデザイン: 梅田宏明
イメージディレクション: S20
イメージプログラミング: 堂園翔矢、加治洋紀

http://www.ladanceproject.com/repertory/peripheral_stream

パリオペラ座バレエ団の新芸術監督であるベンジャミン・ミルピエ率いるL.A. Dance Projectに、日本人振付家として初めて招聘され製作された本作。ここで梅田は「すべての動きの核は、実は存在が不確かである」という仮説からクリエイションを出発させる。例えば、どれほど大きな河であってもつぶさに観察すれば、それは無数のペリフェラル(周辺)な流れにより構成されている。同様に、舞台全体を眺めれば、観客はダンスを鑑賞しているという気分になるわけだが、実際に目にしているのは、ダンサーの重心から派生する末端の流れであり、またそれに付随して構築された電子音やデジタル映像の流れだけである。観客が、動きの起源であるダンサーの「力の流れ」の核を目にすることはほぼできない。言い換えるなら、作品として可視化されるのは、じつはペリフェラルな流れだけなのだ。このコンセプトを体現すべく、舞台上の4人のダンサーは、表層的な「ポーズ」を整えるのでなく、身体の重心から生まれる大小様々な「フロー」で観客の視点を、彼等の身体の部位に、4人の群舞に、あるいは背景の物理現象を思わせるデジタル映像にと誘導していく。そしてときに上半身の震えが背景のデジタル映像とシンクロし、些細な変化が巨大な世界を動かすような錯覚を覚える。振付家がここで生み出すのは従来の古典バレエの規範とは、重心の位置も、呼吸の仕方も、動きの作法も異なるムーヴメント。とはいえもちろん、梅田は歴史あるバレエの芸術性を破壊したいわけではない。そうではなく東洋の身体から派生した「動きのメソッド」を、バレエという西洋で構築された「舞踊のメソッド」の下層に埋め込むことで、東西の審美性を融合させたより強靭なバレエ言語の誕生を目指す。その新時代のバレエへの実験の第一歩が、ここで果敢に行われている。

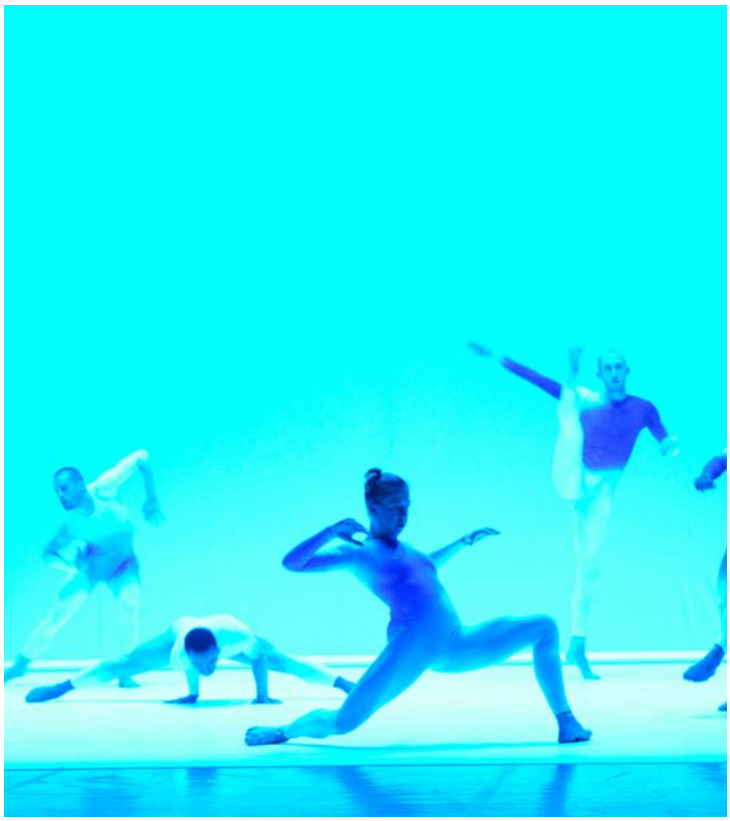
Collaborations

Commissioned by GöteborgsOperans Danskompani Interfacial Scale

(2013年、ヨーテボリ・オペラダンスカンパニー委託作品)

振付・舞台美術・衣装・照明デザイン: 梅田宏明
指揮: Max Renne
作曲: 半野喜弘 (aka RADIQ)
振付アシスタント: Alexandre Bourdat
ビデオ・システムプログラミング: Shoya Dozono
ダンス: GöteborgsOperans Danskompani

http://en.opera.se/forestallningar/out-of-mind-2013-2014/



梅田宏明が初めて欧州の名門バレエ団(ヨーテボリ・オペラダンスカンパニー)から正式に依頼を受けて製作された本作は、11人のダンサー、20人編成のオーケストラ、そして音楽家・半野善弘との共同作業により創作が進められた。「照明/身体、振付/ダンス、音/照明——異なる相が接触する界面 (interfacial) のスケールを変容させたい」というコンセプトを着想点に取る本作では、自明なものとみなされる様々な「境界面」に疑問符を投げかける。例えば、鮮やかな青系統の照明が舞台全面に投射されれば、群青のペイントを散らした衣装を着用したダンサーの身体は部分的に消失し、かつフォルムが歪曲される。果たして、光と身体の界面はどのように認識すべきなのか。あるいはまたリハーサル段階で、作家の構築したキネティック・フォース・メソッドをダンサーの身体の根幹に、ある種の「暗黙知」のように深く埋め込むことで、のちにダンサーが自由に動いたときにさえ、鳥の群れや昆虫のコロニーのような秩序ある「超個体」として作動しているように集団をみせる。果たして、自律的なダンスと他律的な振付の界面はどう見定めるべきなのか。梅田はここで、自身の舞台要素のすべてを振り付けるという考えに則して、振付、照明、音、映像などをひとつのソフトウェアで統合的に管理。このシステムを利用して、舞台上の異なるエレメントのグルーピングを緻密に記述することにより、あらゆる界面に対する観客の視覚認識を操作していく。ときに静謐な光と扇情的なパーカッションがコライドし、ときにエレクトロニックな環境と生身の個体が乖離する。最終的にはそれでいてなぜか、舞台上のすべてが、ひとつの秩序として現前化されてくる。「身体のみならず、空間と時間を統合的に振り付けたい」と梅田は言う。この脱人間中心主義な創作哲学に則り、作家はバレエという規範化された舞踊表現の可能性に敬意を払いつつも、自明視されがちな身体と環境のボーダーを問いなおすことで身体の固体性を再定義し、バレエ表現の可能性をダイナミックに拡張してみせる。

History - Choreography Pieces and Installations

Choreography

4. temporal pattern

2013
National Chiang Kai-Shek Cultural Center, R.O.C., Taipei, Taiwan
Esplanade Theaters on the Bay, Singapore
Aichi Triennale, Aichi Art Center, Aichi, Japan

3. isolation

2013
Théâtre Louis Aragon, Tremblay, France

2012
Tanzhaus, Düsseldorf, Germany
Tanzquartier, Vienna, Austria

2011
Tanz im August, Hebbel am Ufer, Berlin, Germany

2. repulsion

2013
Theatre de Nimes, Nimes, France
Théâtre Louis Aragon, Tremblay, France

2012
TANZWERKSTATT EUROPA, Munich, Germany
Trafo, Budapest, Hungary
Cultuurcentrum Brugge, Brugge, Belgium
Cultuurcentrum Hasselt, Hasselt, Belgium

2011
Festival EXIT, MAC, Créteil, France
Tanzquartier, Vienna, Austria
Julidans, Amsterdam, Holland
Tanz im August, Hebbel am Ufer, Berlin, Germany
Noorderzon festival, Groningen,The Netherlands
Théâtre du Beauvaisis, Beauvais, France
Le Prisme, Élancourt, France

2010
Théâtre Jean Vilar, Suresnes, France
Maison de la Musique, Nanterre, France
PACT Zollverein, Essen, Germany
Theatre National de Bretagne, Rennes, France
Theatre Pole Sud, Strasbourg, France

1. centrifugal

2010
Maison de la culture du Japon à Paris, Paris, France

2009
Full Moon Dance Festival, Pyhäjärvi, Finland
Red Brick Warehouse, Yokohama, Japan

Installation

kinesis #1 – screen field

2015
Yokohama Red Brick Warehouse Number 1, Yokohama, Japan

2013
Cinéma Jacques Tati, Tremblay-en-France

split flow installation

2013
Tanzhaus, Dusseldorf, Germany

2012
Gallery Azamino, Kanagawa, Japan

2011
Glow, Van Abbemuseum, Eindhoven

Holistic Strata Installation

2013
Art Brussels: The Party, Brussels, Belgium

2011
Festival EXIT, MAC, Créteil, France
Gare de Lille, Lille, France
Espace Sculfort, Maubeuge, France

Haptic Installation

2012
Théâtre Louis Aragon, Tremblay, France

2011
Festival EXIT, MAC, Créteil, France
Gare de Lille, Lille, France
Espace Sculfort, Maubeuge, France
Scopitone, Nantes, France

2010
Aichi Triennale, Aichi, Japan

History - Solo Pieces

Solo

Intensional Particle

2015
Festival VIA, Jeumont, France
Maison des Arts de Creteil, Festival EXIT, Creteil, France
Casino Theatre, Mapping Festival, Geneva, Switzerland

split flow

2015
Festival VIA, Jeumont, France
Maison des Arts de Creteil, Festival EXIT, Creteil, France
MUTEK Montreal, Montreal, Canada
Casino Theatre, Mapping Festival, Geneva, Switzerland

2014
Stereolux, Nantes, France
Rive gauche, Automne en Normandie, Normandie, France

2013
Théâtre Louis Aragon, Tremblay-en-France

Holistic Strata

2015
Trafó, Budapest, Hungary
MUTEK Montreal, Montreal, Canada

2014
Event of Beakerhead, Calgary, Canada
La Base sous-marine, #SDBX4, Bordeaux, France
Stereolux, Nantes, France
Rive gauche, Automne en Normandie, Normandie, France

2013
Esplanade Theaters on the Bay, Singapore
Aichi Triennale, Aichi Art Center, Aichi, Japan
Tanzhaus, Dusseldorf, Germany
Theatre Junction, Calgary, Canada
Canadian Stage, Toronto, Canada
Push Festival, The Dance Centre, Vancouver, Canada
NYLA, New York, US
Redcat, L.A., US
Capitol Theatre with Wexner Center, Columbus, Ohio, US

2012
La Biennale de la Danse, Lyon, France
BIPOD, Beirut, Lebanon
Usine C, Festival Temps d'Images, Montreal, Canada
London International Mime Festival, London, UK

2011
YCAM, Yamaguchi, Japan
Festival EXIT, MAC, Créteil, France
Festival VIA, Maubeuge, France
Art Rock, Saint-Brieuc, France
Julidans, Amsterdam, Holland
Noorderzon festival, Groningen, The Netherlands
Todaysart Festival, Den Haag, The Netherlands
Todaysart Festival, Brussels, Belgium
Festival de Danse de Cannes, Cannes, France
Centre des Arts, Enghien, France

Haptic

2014
Espace Malraux, Herblay, France
Macao Cultural Centre, 25th Macao Arts Festival, Macao, Macao
La Base sous-marine, #SDBX4, Bordeaux, France
Espace Malraux, Herblay, France
25th Macao Arts Festival, Macao Cultural Centre, Macao

2013
Theatre Junction, Calgary, Canada
Canadian Stage, Toronto, Canada
Push Festival, The Dance Centre, Vancouver, Canada
NYLA, New York, US
Redcat, L.A., US
Capitol Theatre with Wexner Center, Columbus, Ohio, US
National Chiang Kai-Shek Cultural Center, R.O.C., Taipei, Taiwan

2012
Usine C, Festival Temps d'Images, Montreal, Canada
London International Mime Festival, London, UK
Trafo, Budapest, Hungary

2011
De Warande, Turnhout, Belgique
Cultuurcentrum, Hasselt, Belgique
Dublin Dance Festival, Dublin, Ireland
Toneelschuur, Haarlem, The Netherlands
Théâtre du Beauvaisis, Beauvais, France
Le Prisme, Élancourt, France
Centre des Arts, Enghien, France

2010
The Tramway, Glasgow, UK
ESAM, Caen, France
Theatre de Bourg-en-Bresse, Bourg-en-Bresse, France
Aichi Triennale, Aichi, Japan
Pecs International Dance Festival, Pecs, Hungry
Alhondlga Bilbao Cultural Centre Venue, Bilbao, Spain
Melbourne International Arts Festival, Melbourne, Australia
Maison de la culture du Japon à Paris, Paris, France
Theatre Pole Sud, Strasbourg, France
Maison de la Musique, Nanterre, France
Theatre National de Bretagne, Rennes, France

2009
Charleroi Danse, Charleroi, Belgium
Verkadefabriek, Den Bosch, The Netherlands
La Bâtie, Festival de Genève, Geneva, Switzerland
Théatre de Nimes, Nimes, France
Red Brick Warehouse, Yokohama, Japan
Spring Dance, Utrecht, Holland
Spoleto Festival, Spoleta, USA

2008
Festival d'Automne, MAC, Créteil, France

Adapting for Distortion

2015
Un Desierto para la Danza 23, Hermosillo, Mexico

History - Solo Pieces

2014
Centre National de Création et de Diffusion culturelles France, Châteauvallon, France
Espace Malraux, Herblay, France
25th Macao Arts Festival, Macao Cultural Centre, Macao

2012
27th Modern Art Days, Bialystok, Poland
La Comète, Chalons-en-Champagne, France

2011
De Warande, Turnhout, Belgique
Cultuurcentrum, Hasselt, Belgique
Dublin Dance Festival, Dublin, Ireland
Toneelschuur, Haarlem, The Netherlands
Scopitone, Nantes, France
Kulturzentrum Tempel, Karlsruhe, Germany

2010
Club Transmediale, Berlin, Germany
The Tramway, Glasgow, UK
Theatre d'Arras, Arras, France
Theatre de l'Archipel, Perpignan, France
ESAM, Caen, France
Theatre de Bourg-en-Bresse, Bourg-en-Bresse, France
Aichi Triennale, Aichi, Japan
DANS PLATFORM ISTANBUL, Istanbul, Turkey
Alhondlga Bilbao Cultural Centre Venue, Bilbao, Spain
Melbourne International Arts Festival, Melbourne, Australia
Maison de la Musique, Nanterre, France
Theatre National de Bretagne, Rennes, France

2009
Charleroi Danse, Brussels, Belgium
Todays' Art Festival, Den Haag, The Netherlands
La Bâtie, Festival de Genève, Geneva, Switzerland
Théâtre des Salins, Martigues, France
Théatre de Nimes, Nimes, France
Spring Dance, Utrecht, The Netherlands
Japan Society NY, New York, USA
Festival Chiassodanza, Chiasso, Switzerland

2008
Festival Roma Europa, Rome, Italy
Festival d'Automne, MAC, Créteil, France

Accumulated Layout

2015
Trafó, Budapest, Hungary
Nacional de las Artes (CENART), Mexico City, Mexico

2013
Tanzhaus, Dusseldorf, Germany

2012
Ramallah Contemporary Dance Festival, Ramallah, Palestine
BIPOD, Beirut, Lebanon
CC Maasmechelen, Maasmechelen, Belgium

2012
TANZWERKSTATT EUROPA, Munich, Germany

2011
YCAM, Yamaguchi, Japan
L'Avant-Scène, Cognac, France
Scopitone, Nantes, France
Maison de la Musique, Nanterre, France

2010
Theatre d'Arras, Arras, France
Theatre de l'Archipel, Perpignan, France
Salle Georges Brassens, Boulogne, Boulogne sur Mer, France
PACT Zollverein, Essen, Germany

2009
National Chiang Kai-Shek Cultural Center, R.O.C., Taipei, Taiwan
Tanzquartier, Vienna, Austria Sydney Opera House, Sydney, Australia
HPAC Theater Hall, Hyogo, Japan
Théâtre des Salins, Martigues, France
The Dance Centre, Vancouver, Canada
Festival Antipodes, Morlaix, France
Cultuurcentrum Brugge, Brugge, Belgium
Théâtre A Châtillon, Chatillon, France
Biennale Val de Marne, Villejuif, France
Hippodrome Scène nationale, Douai, France
Japan Society NY, New York, USA
Toneelschuur Haarlem, Haarlem, The Netherlands
De Warande, Turnhout, Belgium
Theater aan het Vrijthof, Maastricht, The Netherlands
Schouwburg, Arnhem, The Netherlands
Parktheater, Eindhoven, The Netherlands
Melkweg Theater, Amsterdam, The Netherlands
Cultuurcentrum, Hasselt, The Netherlands
Goudse Schouwburg, GoudaThe Netherlands
De Tamboer, Hoogeveen, The Netherlands
Stadsschouwburg, Groningen, The Netherlands
Kortrijkse Schouwburg, Kortrijk, The Netherlands
Rotterdamse Schouwburg, Rotterdam, The Netherlands

2008
Le Fanal, Scène Nationale, Saint-Nazaire, France
New National Theater, Tokyo, Japan
La Bâtie, Festival de Genève, Geneva, Switzerland
Tanz im August, Berlin, Germany
Full Moon Dance Festival, Pyhäjärvi, Finland
Festival Julidans, Amsterdam, Nederlands
Grec Festival, Barcelona, Spain
Dance Week Festival, Zagreb, Croatia
ArtRock Festival, St.Brieuc, France
Festival Bo:m., Art Theater, Seoul, Korea
New Territories, Glasgow, UK
La Ferme du Buisson, (Hors Saison, Arcadi), France

2007
Teatro Palladium, Romaeuropa Festival, Rome, Italy
MeetingPoints5, HAU ZWEI, Berlin, Germany
Theatre de Nimes, Nimes, France
MeetingPoints5, Ness El fen – Hall, Tunis, Tunisia
MeetingPoints5, Al Madina Theatre, Beirut, Lebanon
MeetingPoints5, Rawabet Theatre, Cairo, Egypt
Centre des Arts, Enghien, France
Actoral.6, Marseille, France
Wexner Center for the Arts, Columbus, USA
Festival Esterni, Terni, Italy
Maison de la danse, Lyon, France
Kunsten FESTIVAL des Arts, Brussels, Belgium
Théâtre national de Chaillot, Paris, France
NoorderZon '07, Groningen, Holland
MLADI LEVI 2007, Ljubljana, Slovenia

History - Solo Pieces

Duo

2014
Time To Dance, Riga, Latvia

2013
Theatre de Nimes, Nimes, France

2011
Festival de Danse de Cannes, Cannes, France

2010
Pecs International Dance Festival, Pecs, Hungry
The Blue Coat, Liverpool, UK

2009
Festival Les Derniers Hommes, Dijon, France
garajistanbul, Istanbul, Turkey
Ten Days on the Island, Hobart, Australia

2008
Festival Scopitone, Nantes, France
CAMERA JAPAN, Rotterdam, Nederlands
Tanz im August, Berlin, Germany
Full Moon Dance Festival, Pyhäjärvi, Finland
Les Spectacles Vivants – Centre Pompidou, Paris, France
Plaza Futura, Eindhoven, The Netherlands
London International Mime Festival, Barbican Center, London, UK

2007
Maison de la culture du Japon, Paris, France
Le Carré des Jalles, St. Medard, France
El Mediator, Perpignan, France
Bilbao – Festival B.A.D., in La FuNdiciÓn, Bilbao, Spain
Museo ARTIUM, Vitoria, Spain
Festival de Otoño, Madrid, Spain
Actoral.6, Marseille, France
CONTEMPORANEA 07, Prato, Italy
VIA Festival 2007, Maubeuge, France
NoorderZon '07, Groningen, Holland

2006
La Chaufferie, Saint-Denis, France
Kichijoji Theater, Tokyo, Japan

2004
Panorama dance festival, Rio de Janeiro, Brasil SESC Pompeia, Sao Paulo, Brazil

while going to a condition

2015
Un Desierto para la Danza 23, Hermosillo, Mexico
Yokohama Red Brick Warehouse Number 1, Yokohama, Japan
Nacional de las Artes (CENART), Mexico City, Mexico

2014
Time To Dance, Riga, Latvia
Pavillon Noir, Aix-en-Provence, France
Châteauvallon – Centre National de Création et de Diffusion culturelles France
NeXTones, Crevoladossola, Italy
Le Monde Festival at L'Opéra Bastille, Paris, France

2013
Danse et Vous L'Avant-Scène, Cognac, France

2012
Esplanade Theaters on the Bay, Singapore
Gallery Azamino, Kanagawa, Japan
Ramallah Contemporary Dance Festival, Ramallah, Palestine
27th Modern Art Days, Bialystok, Poland
Theatro del Mayo 25, Buenos Aires, Argentina
CC Maasmechelen, Maasmechelen, Belgium
La Comète, Chalons-en-Champagne, France

2011
Tanzquartier, Vienna, Austria

2010
The Blue Coat, Liverpool, UK
Maison de la Musique, Nanterre, France

2009
Festival Les Derniers Hommes, Dijon, France
National Chiang Kai-Shek Cultural Center, R.O.C., Taipei, Taiwan
Verkadefabriek, Den Bosch, The Netherlands
Sydney Opera House, Sydney, Australia
HPAC Theater Hall, Hyogo, Japan
garajistanbul, Istanbul, Turkey
Tanzhaus, Dusseldorf, Germany
The Dance Centre, Vancouver, Canada
Antipodes 2009, Morlaix, France
Cultuurcentrum Brugge, Brugge, Belgium
Théâtre A Châtillon, Chatillon, France
Ten Days on the Island, Hobart, Australia
Biennale Val de Marne, Villejuif, France
Spoleto Festival, Spoleta, USA
Festival Chiassodanza, Chiasso, Swiss
Toneelschuur Haarlem, Haarlem, The Netherlands
De Warande, Turnhout, Belgium
Theater aan het Vrijthof, Maastricht, The Netherlands
Schouwburg, Arnhem, The Netherlands
Parktheater, Eindhoven, The Netherlands
Melkweg Theater, Amsterdam, The Netherlands
Cultuurcentrum, Hasselt, The Netherlands
Goudse Schouwburg, Gouda, The Netherlands
De Tamboer, Hoogeveen, The Netherlands
Stadsschouwburg, Groningen, The Netherlands
Kortrijkse Schouwburg, Kortrijk, The Netherlands
Rotterdamse Schouwburg, Rotterdam, The Netherlands

2008
Festival Roma Europa, Rome, Italy
"Croisement" at Espace Michel Simon, Noisy-le-grand, France
Théâtre Louis Aragon, Tremblay, France
CAMERA JAPAN, Rotterdam, Nederlands
La Bâtie, Festival de Genève, Geneva, Switzerland
Festival Julidans, Amsterdam, Nederlands
Grec Festival, Barcelona, Spain
Festival Bo:m., Art Theater, Seoul, Korea
Plaza Futura, Eindhoven, The Netherlands
London Mime Festival, Barbican Center, London, UK
New Territories 2008, Glasow, UK
La ferme du buisson (Hors Saison, Arcadi), France
Dance Week Festival, Zagreb, Croatia

2007
Arcachon Expansion, Arcachon, France
Le Carré des Jalles, St. Medard, France

History - Solo Pieces

MeetingPoints5, HAU ZWEI, Berlin, Germany
El Mediator, Perpignan, France
Theatre de Nimes, Nimes, France
MeetingPoints5, Ness El fen – Hall, Tunis, Tunisia
MeetingPoints5, Al Madina Theatre, Beirut, Lebanon
MeetingPoints5, Rawabet Theatre, Cairo, Egypt
CULTURGEST, Lisboa, Portugal
Bilbao – Festival B.A.D., in La FuNdiciÓn, Bilbao, Spain
Museo ARTIUM, Vitoria, Spain
Festival de Otoño, Madrid, Spain
Wexner Center for the Arts, Columbus, USA
Festival Esterni, Terni, Italy
TorinoDanza, Torino, Italy
Maison de la danse, Lyon, France
Kunsten Festival des Arts, Brussels, Belgium
VideoDance 2007, Athens, Greece
Théâtre national de Chaillot, Paris, France
IDN, Barcelona, Spain
VIA Festival 2007, Maubeuge, France
Sziget Festival 2007, Budapest, Hungary
MLADI LEVI 2007, Ljubljana, Slovenia

2006
Moving in November, Helsinki, Finland
MES DE DANZA, Seville, Spain
CADIZ EN DANZA, Cadiz, Spain
Art Rock festival, Saint-Brieuc, France
En Pé de Pedra, Santiago de Compostela, Spain
Printemps de la danse, Angouleme, France
La Chaufferie, Saint-Denis, France

2005
Biennale nationale de danse du Val-de-Marne, Paris, France
Contemporanea festival, Prato, Italy
Dance Theater Workshop, NY, US

2004
ILE DANSE FESTIVAL, Corsica, France
Teatro Arsenale, uovo, Milan, Italy

Les Plateaux de la Biennale, Paris, France
Les Floraisons du Botanique, Brussels, Belgium
FIVU 04, Montevideo, Uruguay
Surdepierto, Buenos Aires, Argentine
Danzalborde Dance Festival, Valparaiso, Chile
Panorama Dance Festival, Rio de Janeiro, Brasil
SESC Pompeia, Sao Paulo, Brasil

2003
Aka Renga Sohko, Yokohama Dance Collection, Yokohama, Japan
Agora de la danse, Nouvelle dance festival, Montreal, Canada
dietheater, Wien, Austria
4 + 4 days in motion, Prague, Czech

2002
Landmark Hall, Yokohama Dance Collection, Yokohama, Japan
MC93, Rencontres Chorégraphiques Internationals, Paris, France
Monty Theater, Junge Hunde festival, Antwerp, Belgium
Le lie unique, Oriental extreme, Nantes, France

Contact, links and etc

Contact

Ccmpany:	S20
Director:	梅田 宏明
Production Manager:	田野入 涼子
E-mail:	contact(at)hiroakiumeda.com
Web:	http://hiroakiumeda.com

VIDEOS / Vimeo
http://vimeo.com/s20/videos

Somatic Field Project
http://hiroakiumeda.com/somatic.html

Facebook - S20 Hiroaki Umeda
https://www.facebook.com/s20hiroakiumeda

Facebook - Somatic Field Project
https://www.facebook.com/somaticfieldproject